公開講演

十八世紀諷刺文学の韓日対比考察

——朴趾源と平賀源内を中心に——

Eighteen century satirical literature in Korea and Japan: a comparative inquiry, with special attention to Pak Chi-wôn and Hiraga Gennai

金　一根*

A broad overview of the world's literature in the eighteenth cetury reveals that satire had become the object of serious literary endeavor in England, Qing China, Yi dynasty Korea, and Japan. Famous writers whose work helped to establish this trend include Jonathan Swift (1667-1745) in England (cf., e. g., *Gulliver's Travels*, 1726), Wu Qing-zi 呉敬梓(1701-54) in China (e. g. *Rulinwaishi* 儒林外史, ca. 1735), Pak Chi-wôn 朴趾源(1737-81) in Korea (e.g. *Yangbanchôn* 両班伝, ca. 1757), and Hiraga Gennai 平賀源内(1728-80) in Japan (e.g. *Fūryūshidōkenden* 風流志道軒伝, 1764).

What is more, it is a matter of considerable interest and significance that these writers all came to the fore during the middle part of the eighteenth century.

Putting Swift, the lone Westerner, aside, we assume that insofar as there is no real evidence of mutual influence at work in the Korean, Japanese, and Chinese examples just cited, the

* KIM, Il-Geun　建国大学校教授

reasons for their common satirical bent must lie with the authors themselves and similarities in the environments in which they lived and wrote.

In looking back on this period, there are admittedly difficulties in positing out-and-out evidence of change in the actual structures of political and economic institutions. However, if we view the times through the idealizing world created in works of literature, it is clear that in all three of these Asian countries, the modern character was already quite visibly present in the eighteenth century: resistance to the weight of tradition, precipitated by the decay of the feudal system, a capitalist economy of mercantilism, the new influence wielded by the common people, and the first signs of a national consciousness are all manifested in the literature.

Friction between these modernist (i.e., anti-feudal) tendencies and the established order which sought to repress them gave rise to a cultural and social ferment that nurtured the satirical element in literature. It seems safe to view such conditions as historical prerequisites to the rise of satire; their prevalence at the time explains why satire should be a literary product peculiar to the eighteenth century.

I should therefore like to inquire into both the general and distinctive qualities of satirical literature in eighteenth century Korea and Japan, by first cutting the picture down to Pak Chi-wôn and Hiraga Gennai, in order to compare and contrast their works and the environments in which they wrote. I then hope to take such similarities and contrasts as suggest themelves as a

point of departure in considering topics of mutual interest for the future of comparative studies in Korean and Japanese literature.

I 緒　言

私は平素韓国の近世の散文を勉強しているのですが、勉強を始めるとすぐに疑問に思われましたのは、近世における英国の『ガリバー旅行記』、清国の『儒林外史』、韓国の朴趾源の諸作品などには共通性があり、所は違っても、十八世紀文学には何か世界的同時性があるのではないかということでした。また暉峻康隆先生の『近世文学の展望』（明治書院昭28）を読むと十八世紀の日本の作品の近代性について書かれていたので、一層視野を広げて勉強したいと考えておりました。

今回幸いに国際交流基金のフェローとして東京大学の比較文学研究室で十八世紀の韓日文学の比較研究をする機会を得ましたが、先程紹介されましたように勤務校（建国大学校）の事情に依って計画通りにはかどっていません、それで本日講演をするようにお話があった時最初は辞退したのですが、私の勉強にもなりますし、また両国の文学研究の交流の現状はなお必しも十分な状況ではないことを考え、私の話も意義のあることではないかと思いましたので、あえてお引き受けいたした次第です。

もう一つ、韓国の人名、地名、作品名など、皆様の便宜のために、日本の漢字音でお話しようと思いますが、或いは間違いがあるかも知れません。この点も最初にお許しを願っておきます。

本日お話しするテーマは、「十八世紀諷刺文学の韓日対比考察」という大きなものですが、それに「朴趾源と平賀源内を中心に」という副題をつけました。お話しをする内容はここに要旨がありますので、最初にそれを読ませていただきます。

「世界的に眺めれば、英国の Jonthan Swift（1667～1745年）作 'Gulliver's

Travels'（1726年）、清国の呉敬梓（1701～1754年）作『儒林外史』（1735年頃）、韓国の朝鮮朝の朴趾源（1737～1781年）作『両班伝』（1757年頃）等、日本の平賀源内（1728～1780年）作『風流志道軒伝』（1764年）等が、各々その国における本格的諷刺文学作品の始りでありました。これらが、皆十八世紀中葉という共時性を持つ事は重大で、かつ興味ある事実と言えましょう。

洋の東西を異にするSwiftの場合はさておきまして、韓、日、清、三者間においても作品相互間に影響の受授があった事実は見えません。それがない以上は、この共時性の原因は、これらの作家達の持つ個性の共通性と、その処した時代環境の類似性とに求める外はないと思います。

政治や経済等の現実の構造においては、十八世紀においてただちに封建制の崩壊や近代的性格の出現を端的に肯定することはできませんが、しかし理想を内容とする文学作品を通して見れば、東洋三国においても、すでに十八世紀には封建体制の崩壊がもたらす伝統への反抗、重商主義的な資本経済とそのもとにおける庶民の抬頭、国家民族思想の芽生え、等近代的性格が相当に表出されているのがわかります。

このような近代指向性（反封建性）と、これを抑圧する支配層の強権との間の摩擦面に醗酵する作品が諷刺作品であり、このような条件が本格的な諷刺文学の生まれる時代条件といえましょう。だから諷刺文学は十八世紀の特産物ともいえます。

以上は一般論ですが、範囲を挾めて、朝鮮朝の朴趾源と、日本の平賀源内の作家、作品と、その背景を対比し、その結果をもって十八世紀諷刺文学の両国間の共通性と、それぞれの特殊性をさぐり、一歩進んで、これを魁にして将来の韓日文学の比較研究に対する共同の関心事を提起しようというのが本講演の意図であります。

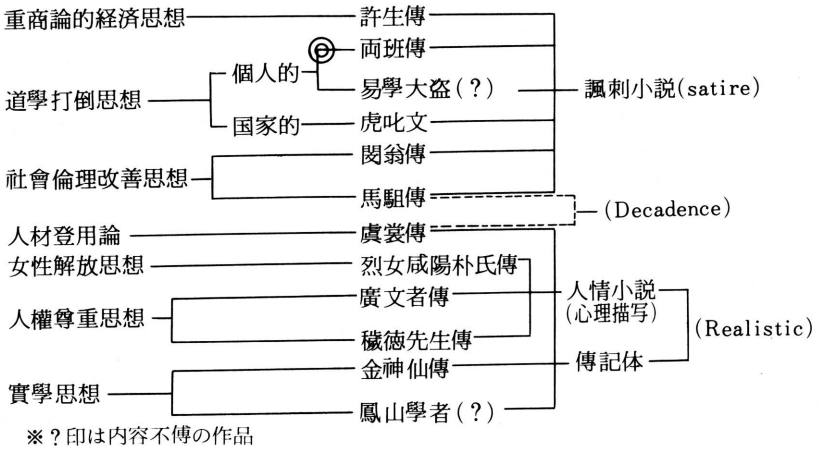
そこで、朴趾源と平賀源内を中心に比較をするわけですが、それを効果的に行うには、こちらの皆さんに、まだあまり知られていない韓国の作品から紹介するのがよいだろうと思います。平賀源内については私もまだ研究の進

行中であり、多くの方々の研究を利用させていただくことになりますので、ここでは、まず朴趾源の作品考察から始めます。

II　朴趾源の諷刺作品

朴趾源の号は燕岩といい、たくさんの作品があります。そのうちでも特に小説だけを取り出して考察しようと思います。朴趾源の小説には表に掲げた十二の漢文で書かれた短編小説があります。

資料１　小説作品概観



※？印は内容不傳の作品

この表の左の方にはその作品に書かれた思想が挙げてあります。また右側には技法面の種類を挙げました。諷刺というのは、反抗をそのままリアリスティックに書けないので止むを得ずとった表現という意味で、技法の一つとして挙げてあります。

韓国の文学では、古典文学の範囲について一つの問題があります。それは韓国固有の文字であるハングルで書かれた作品と、漢文で書かれた作品とがあり、これらを同じ文学として扱うかどうかということです。いろいろ問題もありますが現在では、やはり第一義的な文学は固有の文字のハングルで書

かれたものということになっています。したがって漢文で書かれたものは二義的な文学ということですが、その内の、説話と小説の二つのジャンルについては、その発展の歴史から見てハングルで書かれたものと同じ歴史を持っているので、これらの文字は漢文で書かれているけれども、ハングルで書かれたものと同じ資格の文学として考えられています。(日本文学でも同じ立場と思いますが)

『許生伝』は許生という両班の話です。両班というのは後にも出てきますが、東班と西班つまり文官と武官の身分で、日本でいえば士族という概念で把えればよいのではないかと思います。もっとも日本では文官と武官では、サムライすなわち武官の方が重要ですが朝鮮朝では文官の方が重要でした。その両班の許生という人が経済的に困って、家族のために両班の身分を捨てて商売を始め、お金をもうけて成功した話です。これは明らかに商業経済の抬頭による重商主義的思想を示したもので、近代思想の一つの現れであると思います。

次の『両班伝』と『虎叱文』は道学打倒思想を書いています。あとで『両班伝』の例をお話したいと思いますが、当時の韓国の道学つまり朱子学を打破しようというものです。以下、それぞれの作品には社会倫理改善思想、人材登用論、女性解放思想、人権尊重思想、実学思想など近代を指向する思想が見られます。表の中で『易学大盗』と『鳳山學者』には（？）印が付されていますが、これらは本文が失われて名前だけが伝えられているものです。したがって完全な内容はわかりませんがそれらの作品の成立について書かれたものを材料にして考えて見れば、それぞれ表に示したような思想のものだったと思われます。

これら十二の短編小説のうち、特に重要なのは『許生伝』『両班伝』『虎叱文』『烈女咸陽朴氏伝』の四つです。『烈女咸陽朴氏伝』は、小説ではなくて実記で、主人が亡くなり、三年の喪をすませて、その場で直ちに自決をとげた婦人の話です。韓国では未亡人が自害する例は少くありません。同じ儒教

国でも日本ではそのような例は多くないと思います。未亡人ということのほんとうの意味は韓国でこそ実感があるのではないでしょうか、語源的には未亡人は宜亡未亡（宜しく死ぬべき人が未だ死なず）の略語で、夫が死ねば、盡すべき対象がないから死なねばならないとのことです。当時韓国では寡婦の再婚は法律で禁ぜられていました。またひそかに再婚してもその子は正当性を認められません、だから死ぬのがましだというので、よくこのような自決が起りました。朴趾源はその頃安義県（咸陽郡の隣）の長官をしていました。そして附近の県の役人達がみなこの婦人を烈女といって讃えました。朴趾源もこの婦人の実記を書いて讃えましたが、その序文に自分の平素の思想を書きました。それはやはり未亡人の手で育てられたある県長官の話です。

「その長官の領内で未亡人が風紀を乱した、という噂で捕えられました。その裁判について長官は自分も未亡人の母に育てられたのだからといって母の意見をたずねました。母は懐から小銭を取り出してその長官に見せました。それはピカピカに光っていました。そして私はお前を育てる間、いつもこの銭を廻して夜毎のさびしさに耐えてきました。だから他人の噂だけでなく、自分で事実を確かめて慎重に裁きをするようにと諭した」

という話です。

序文はこの話を引用して、男女関係、陰陽問題に觸れています。「思想根於陰陽」の句はフロイドの精神分析学に通ずるものがあります。この序文の内容は女性解放（改嫁許容）の思想に通ずるものです。こういう思想は当時そのまま書くことができなかったので、このように烈女伝の序文という形式を借りて表現する以外はありませんでした。

『両班伝』の内容は次のようなものです。

或る県の士族がおりましたが、大変貧しくて、政府から貸与された米を数年間も返済できなくて千石もの負債を負ってしまいました。そこで上級官庁の監査にかかってやむなく厳罰を命ぜられました。その時県長が何か救うよい方法はないかと考えたあげく彼の両班の身分を金持の商人に売って負債を

返すように命じ、両班の身分を千石で売買する契約書をつくりました。ここに示したものがその契約書の内容で、両班がしなければならない條件が37か条も書かれています。

資料(2)　両班伝（契約書）

乾隆十年　九月日　右明文段
屈賣兩班　爲償官穀　其直千斛
維厥兩班　名謂多端
読書曰士
從政爲大夫
有德爲君子
武階列西
文秩叙東
是爲兩班
任爾所從　絶棄鄙事
希古尚志
五更常起　點硫燃脂　目視鼻端
會踵支尻　東萊博議　誦如氷瓢
忍饑耐寒　口不説貧
叩齒弾腦　細嗽嚥津　袖刷毳冠
拂塵生波　盥無擦拳　漱口無遇
長聲喚婢
緩步曳履
古文眞寶　唐詩品彙　鈔寫如荏　一行百字
手毋執錢
不問米價
暑毋跣襪
飯毋徒髻
食毋先羹
歠毋流聲
下箸毋舂
毋餌生葱
飲醪毋最鬚
吸煙毋輔竈
忿毋搏妻
怒毋踢器

毋拳毆兒女
毋詈死奴僕
叱牛馬　毋辱鬻主
病毋招巫
祭不齋僧
爐不煮手
語不齒唾
毋屠牛
毋賭錢
丹此百行
有違兩班
持此文記
卞正干官
……

等、平常人として不可能な条件がずっと並んでいます。はじめは両班になることを喜んでいた商人が、これを見て、これはとてもかなわない。むしろ私に泥棒になれという方がましだ、上げた金はもう返さなくてもよいから、両班は返上だといって契約書を投げ捨てて逃げてしまいました。

作者の朴趾源も両班の身分でしたが、落ちぶれている不遇に不満をもっており当時腐敗した体制に対して批判的な意見を持っていました、そこで自分の思想をこのような作品に書きました。それを要約すれば

(1)階級打破

(2)儒教の形式主義の罵倒

(3)封建士族の経済的崩壊の暗示

(4)士族の偽善的假面の曝露

などであり、くわしいことは私の『燕巖小説の近代的性格』という本に書かれていますので興味のある方はお読み戴きたいと思います。

III　平賀源内の作品との対比

これらの点は日本の十八世紀の平賀源内についても同様だといえます。平賀源内の作品は多くの研究者の扱った研究を見ると、滑稽本として扱われています。しかし単なる滑稽として軽く扱うだけでなく、その時代、時勢との関係を重要視すべきではないでしょうか、その点で、単なる滑稽の笑いにとどまった十返舎一九などとは異ります。源内の作品は単に個人的な笑いではなく、広い社会的、あるいは民衆的な大きな笑いを対象とするものでその点が私が単なる滑稽本でなく、諷刺文学であると考えるゆえんです。源内には、

(1)『根南志具佐（前編）』

　『根無草後編』

(2)『風流志道軒伝』

(3)『風来六部集』

(4)『神霊矢口渡』

などの作品がありますが、そうした諷刺文学という意味で代表的なものは(1)と(2)、中でも(2)の『風流志道軒伝』で、この中には源内の当時の体制に反抗する精神が表わされています。

次にこれらの源内の作品と、先に述べた朴趾源の作品を比べて、共通した点、異る点を考えて見ますと、共通した点としてまず文体が挙げられます。朴趾源の作品はいわゆる稗官文体、すなわち堂々とした正常な漢文ではなく、ややいたづら気けのある小説文体で、これは源内らの滑稽本の戯文に通ずるものです。第二は両者の出身階級で、朴趾源が不遇な士族の出身であって、出世している新戚など現体制への政治的不満を文学に託したことは、源内が下層士族、足軽の出身で、はじめきわめて低い禄で高松藩の薬坊主として仕えたが江戸に出て浪人し、政治的よりも、文学やさまざまな（物産学）活動に従ったことと共通しています。第三は、西洋文明との接觸で、朴趾源は清への使いに随行し、そこで近代の西洋文明の知識を得、それまでの思想に一層拍車をかけられたのに対し、源内も長崎でオランダがもたらす西洋文明の

近代知識を学びました。

両者の作品上の共通点を、全部挙げる遑が無いのですが、次に代表的な一例をあげます。

朴趾源の『虎叱』の中で人間を罵りながら儒者、醫者、巫者を痛罵して

「儒者　諛也」

「醫者　疑也」

「巫者　誣也」

という場面があります。此に対して源内は「根南志具佐」の自序文に神佛儒醫を次の如く諷刺しました

一日貸本屋何某来つて、予に乞ふことあり。其源を尋ぬれば、こいつまた慾ばる病の膏肓に入りたる親父なり。是を治せんとするに、鍼灸薬の及ぶべきにあらず。是を戒に儒を以てすれば、彼曰く「聖人物を食せざりしや。」神道を以てすればまたいわく、「貧しく正直なりがたし。」仏法を以てすれば又曰く、「未来より現在なり。冀はまづ鉤と縄とを賜へ、家内の口を天井へつるして、而シテ後教を受べし。」予答ふるに辞なく、即チ筆を執つて此篇をなし、名づけて根南志具佐といふ。

共通点は以上のようなことですが次にどういう相異があるかと考えて見ますと、韓国が陸続きなのに対して日本は孤立した島国ですから、韓国が半封建的であったのに対して日本は相当熟した封建制であったという地域性の相違点がありました。一方源内は長崎で直接蘭学者やオランダの文物から近代西洋の知識を学んだのに対して朴趾源はそれを清国を通じて学んだのでやはり近代性ということでは間接的で弱いと思います。そのことは一般的にも韓国の方が近代化において少し遅れたことにもつながったと思われます。もう一つの相異点は、たしかにはじめ若い時には朴趾源は盛んに諷刺や反抗を行ないますが、やがて晩年には官途に上り支配階級と妥協し、あまり高い地位ではありませんが県の長官になります。しかし一方源内の方は獄中で処刑されることになるのですから、やはり生涯作品の中でも反抗の精神は強かった

だろうと思われます。

朴趾源と平賀源内と両者を対比して見れば大体以上のようにまとめるこのができると思います。

Ⅳ　結語（問題の提起）

以上、韓国の朴趾源と日本の平賀源内の諷刺作品を対比考察することによって、十八世紀に於ける両国の諷刺文学の成立と有様を大体確めることが出来ました。

各々の諷刺作品が、当時の崩れかかった封建体制に反抗する近代指向性が文学に表出される結果であることも認められると思います。それで緒言で掲げた東洋文学においても、十八世紀には近代性が醸され西欧文学の足並と通ずると見なす可能性が一応説明出来たと思います。

吾人は以上の結論を足場にして次の如く重要な問題を提起する次第です。

韓日両国に於ける近代文学の起点を、十八世紀中葉に置くようその可能性の打診を共同課題にしようとの事です。従来の近代化＝西欧化という既成観念から脱皮し、自主的立場に立って、又文学史は政治経済史より先立つことが出来る（西洋の例）という立場に立って、両国乃至東洋文学の近代性を再評価すれば此の問題は可能になると存じます。

吾人は、韓国近代文学の起点について早くから如上の立場を主張してきました。この問題に対する私の見解を述べた別録の小論を御参考載きますよう御願いをして此度の講演を終らせていただきます。

主要参考書

中村幸彦　校注　風來山人集
暉峻康隆著　近世文学の展望
城福　勇著　平賀源内の研究
芳賀　徹著　評伝　平賀源内

資料(3)　朝鮮朝後期文学の近代的性格

（金一根「アジア公論」1981年８月号）

（会議では全文が配布されたが紙面の都合上本講演に直接関係する一部のみ示す）

近代文学の起点

要するに韓国文学の近代化が、甲午更張を契機として活発になったのは事実であるが、それが単純に西欧の移植ではなく、その出発点は英・正朝以後の平民文学にあったという点を論点としたい。

もう一つ、前もってことわっておきたいことは、文学史と政治史の相違点である。もちろん、政治や芸術は人間生活や国民生活の中で生成するものであるから、共同の地盤の上で育ち、たがいに緊密な関係をむすんでいくのであるが、理想と現実はもともと相違するものであるため、この推移過程はかならずしも一致しない。

西欧の近代化過程をみると、文芸復興―宗教改革―フランス革命―産業革命という順序が、これを証明している。政治は簡単に説明できない複雑な性格をおびるもので、芸術にくらべたら純粋ではない。

近世になって、大院君が鎖国暴政を、民衆の意思を無視して強行したが、民衆は最後の命脈だけは決して曲げることなく大事に維持し、東学乱の蜂起を通じて「近代的正義」を生かした。英・正朝の平民文学は、一時的な萎縮はまぬがれなかったが、決して死滅しなかったし、外面的（政治）な屈辱がはなはだしいほど、内面的（文学）な膨脹はさらに強化されて、甲午更張をむかえたのである。

西欧思潮中心的な追従観を捨て、政治史の束縛から脱して、李王朝後期の平民文学で近代的性格を抽出することにより、わが近代文学の提起点を英・正時代に設定すべく論証したいのが、本稿の主題である。

英・正文学の社会的背景　（略）

実学の啓蒙思想　（略）

英・正文学の近代的性格

朱子学を根本とする李王朝の統治機構が内包する矛盾の上に、壬辰と丙子の両乱がさらに拍車を加えるようになったのち、民衆の自我意識が胎動して、封建社会の崩壊が芽生えはじめ、粛宗朝を経て英・正朝に至り、清から輸入された稗官文学と実学の影響とを合わせた社会的、思想的背景は、必然的に平民文学の開花をもたらした。燕岩文学の反封建性と風刺性を通じて強く表れた近代的性格は、その後続出した「春香伝」などの小説、辞説時調、地唄、閨房歌辞などの平民文学によって、韓国のルネッサンスをなした。

そして甲午更張をきっかけとする欧米近代文学思潮の輸入とともに、量的増大と質的転換を行いながら、近代文学の先鋒である新文学へ綿々と伝承される民族文学の系譜を形成した。

要するに、韓国の近代文学は、その形式的技巧の面においては、甲午更張を契機とする西欧文学に大きく影響された。しかし、その内容的理念と思想面においては、英・正文学で自主的な契機がすでにできあがっていたと結論づけることができる。すなわち、わが近代文学

は英・正朝時代からはじまるが、甲午更張までが前期で、その後を後期に分けるわけである。